

『悪上等』（グッドルーザー）

アルファ324

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『これはあくまで短編さ』『別に連載するわけじゃない』『まあ、書きたくなっちゃったから』

『僕は悪くない』

目次

悪上等（一発ネタ）	1
『悪は悪でも』『下等は嫌い』	7

悪上等（一発ネタ）

黒板があり、扉があり、教卓が、机があり、窓もある。
そんな教室のような場所に『彼女』はいる。

セーラー服を着て、本来座るべきではない教卓に座っている『彼女』。

その姿はまるで学生のように、顔立ちは誰もが見惚れてしまうような綺麗な顔であった。

そんな『彼女』は誰もいない教室でここにはいない『誰か』に向かって話し出した。

「やあ、『読者』の皆様。僕の名前は『安心院なじみ』。気軽に『安心院さん』と呼ばたまえ」

「今回の主役は『ハッピーエンダー』真木真一君ではなく、とある一人の『異常な』『過負荷（マイナス）』だ」

「名前は『亜球磨川 楔（あくまがわ くさび）』彼は僕の知り合いの『球磨川君』に似ていたり似ていなかったりするんだ」

「まあ、『なかったことにする』球磨川君と『リアルとフィクションを螺子換える』亜球磨川君では似ているとは言い難いんだけどね」

「さて、そんな彼は球磨川君と出会ってたり、『一十三組』に所属していたり、etc: あったんだが、今回彼は別世界にてIS学園に入学することとなった」

「だが、そのIS学園は一部を除き全て『転生者』の思うがままにされている。」

「だからこそ、彼には『世界の均衡を守るため』別世界に行ってもらったのさ。」

「さて、このお話はそんな彼がIS学園に転校してどーでもいい理由でその『転生者』を仲間達共に螺子伏せるお話…」

「最後に…これはあくまで作者君が息抜きに書いた…いわば『番外編』みたいな物さ。真木真一君のお話とは全く違う別物と考えてくれたまえ」

「強いて言えば…」

「亜球磨川君を見る時は、今までの物語とは混同せず、現実とも切り離して見てね！」

と、語った彼女のいる教室の様な場所はどんどん遠ざかり、最後に視界は暗転した。

安心院なじみ

所属・ワールドガーディアン

備考：全てを平等に見下す人外。そして、世界を守る守護者の1人。

・
・
・
・

この世界は狂ってしまったらしい。

そう感じたのは、全てが終わった後だった。

誰も彼もが一人の男に目を向け、賛美し、代わりに二人の少年少女が虐げられる。

その少年少女の名は、織斑一夏、篠ノ之箒と言った。

少年はその男に『正義感と実力が釣り合っていない無能』と。

少女はその男に『すぐに暴力を振るう暴力女』と。

少年はその言葉に俯くが少女は困惑した。

少女は『暴力を振るった事は剣道の試合以外は一度も無い』のだ。

なのに、まるで自分が『普段から暴力を振るう』と決め付けられる。

『おかしい』と感じたが少年少女は周りから殴る、蹴るなどの暴行をされ、反論すら出来ず日々を送っていた。

そして、『臨海学校』の日、二人は一人の『天災』と再開する。

天災は唯一、男に目を向けなかった。

むしろ、二人を優しく抱きしめ、男を嫌悪した。

その態度が尺に触ったのか男は『謎の力』を使って少年を『少女』へと変えてしまった。

体、言動、を変えられた少年は深く絶望し男に目を向け…なかった。
むしろ、逆に男を嫌悪した。

男は少々動揺したが、もち直し、天災も含めた三人を連れて帰る。
その時、少年は『もう一人の幼馴染』を思い出していた…

（こんな体にされて、言葉使いも変えられて…こんなんじゃ、天国にいるアイツに顔向けできない…）

「だ、大丈夫か？一夏…その、女の体にされて…」

「あ、うん大丈夫…とは言えないか…」

箒に笑って見せる一夏だが、その笑顔には力がなかった。

「…箒ってさ…アイツの事覚えてる？」

「?…亜球磨川の事か？」

「うん…アイツだったらこんな状況でもヘラヘラ笑ってそうだなあつて」

「…アイツはいじめられてもヘラヘラ笑ってる奴だからな…」

「そうそう！そこを私達がいじめつ子をやっつけたらアイツ、変な顔しちやってさ!!」

「ああ…でもアイツは…」

言い淀む箒、当たり前である。

何故なら二人が話している亜球磨川と言う人間は…事故で亡くなったのだから。

「…うん、アイツはもういない…けどさ、アイツの事だから…どこかで生きてそうだよね…」

「分かるぞ。と言うか、まだアイツの遺体は見つかっていないしな」

「そのうちフラツと現れて『やあ。』とか言って来そう」

「でも、アイツが姉さんみたいに『染まって』いない可能性は低いかな…」

「あつ…そうだよね…もしアイツが生きてて、アイツに殴られたら、心折れそう」

「大丈夫だ、一夏には私がいる。」

「…なんか元々男の私より、箒が男らしいよ…」

そして、時間が過ぎ、遂に学園に帰ってきてしまった。

二人はバスの荷台から拘束された状態で下される。

「おら!!降りろ!!」

「ぐっ!」

「さて? テメエら…反省したか?」

乱暴に二人を下ろす男を天災『篠ノ之束』は睨み付ける。

「…その二人に何をやる気?」

「はっ!!当然、俺様のハーレムに加えてやるんだよ…もちろんテメエもな?」

「…生憎だけど私達はアンタの女になんかならない」

「そうだ!!誰がお前なんかと…」

「へっ!!そんな事がもう言えねえ様にきっちり調教してやっから…覚悟しろよ?」

「「っ…!!」」

三人は歯を食いしばる、それはこの男に対する怒りであった。

「まあ安心しろよな…俺様は優しいからなあ?」

と言いながら三人を学園へと連れて行く。

学園の入り口を開けると男に対する賛美の声が…

聞こえなかった。

何故なら賛美の声を浴びせるはずの生徒達は残らず壁に『マイナス螺子』で貼り付けにされて胸を貫かれていたのだから。

「はっ。」

さつきまで偉そうな態度をしていた男が間拔けな声を出す。

そして、後ろの何人かの女子生徒が貼り付けにされている生徒を見て驚愕の声を上げる。

「そ、そんな…『生徒会』が全滅!？」

「か、各国の『代表候補生』や『国家代表』も残らず全滅!？」

「教師陣まで…そんな…私達がない時に襲撃でもされた訳え!？」

「『いや、ISではこうはならないよ』」

そして、廊下の先からの声に男達は更に驚愕する。

「『IS学園の生徒、並びに教師が残らず串刺しにされている…どんなISパイロットでもこれだけの数、そして実力のある人々をたった数日でここまでボロボロにはできないよ』」

コツコツ…と足音が近付いてくる。

「『一体全体誰が、こんな愉快犯の様な惨劇を演出したのか…』」

窓からの光で、その言葉の主の姿が見える。

「『こんな状況、実に笑えないね。さつきと犯人を見つけないと…』」

それは、童顔の男であり、服装は学ラン。

「『おっと、勘違いしないでくれよ?』」

そしてその手には…

『僕は悪くない。』

マイナス螺子が握られていた。

「なッ!？」

そしてその男は『幼馴染み』である二人とその『姉』である束に微笑む。

『やあ。三人とも久しぶり』

「そ、そんな…」

「ま、まさかお前は…」

「う、嘘ホントに…?」

『僕だよ』

亜球磨川楔

箱庭学園2年生

所属・箱庭学園

スキル・過負荷『否実在性』(リアリティフィクション) 異常『自書創り』(デイクシヨナリーメイカー)

備考：かつて一夏達の幼馴染みをしていた、『普通なだけの人外』

『悪は悪でも』『下等は嫌い』

やあ亜球磨川君。

死んでしまうとは何事じゃ。

「やあ、安心院さん。久しぶり」

うん、久しぶり。

さて、今回の君の死因なんだけど…ええーと『あらゆる武器に貫かれて死亡』だね。

しかも、ありとあらゆる『宝具』と呼ばれる…まあ『英雄の切り札』みたいなものを貯蔵している『王の財宝』（ゲートオブバビロン）を使われてるね。

『王の財宝』って、あの英雄王さんのじゃないっけ？

本来ならそうなんだ。

しかし、それを可能とするのが『転生特典』なんだ。

「へえ〜」

「期待外れもいいところだ。」

おや、もう『勝つ算段』があるのかい？

「いや、僕が『勝つ』んじや意味がない…そう思わない？」

…なるほどね。

「僕はあくまでも、『手伝う』だけだ…亜球磨川だけにね」

おや、僕の真似かい？

「あははは…ゴホン…とにかく、僕みたいな『普通』はその辺で呑気に『平和』を願ってればいいんだよ」

「あ、それとあの『王の財宝』ってもらっていいかな？」

ん、ちよつと待っててくれ。

…オツケー、大丈夫みたいだ。

と言うか、君は『中身はいらぬ』んだろう？

「正解」

ならばよし。

最後に亜球磨川君、あの世界には何人かの『悪平等』がいるから、彼

女らと協力しても構わないよ。

「わっかりましたー！じや、『また今度』『とか』」

うん、君の奮闘を楽しみにしているよ。

「それでは皆さんご唱和下さい!!」

『it's a reality fiction!!』

・
・
・
・

さて、時は遡り亜球磨川が死ぬ前。

「僕だよ」

彼の顔はおそらく返り血であろう血によって赤く染まっている。

そして、返り血を浴びていると言う事はこの惨状を生み出したのはきつと彼なのであろう。

だが、こんな酷い惨状を生み出したにも関わらず、彼はヘラヘラ笑っていた。

「ん？あれえ？』『なんかみんな』『顔が死んでるけど』『なに？葬式の帰り？』」

「な、なに言ってるんだよ…テメエはア!？」

「え？なんで僕』『こんな序盤でやられそうなの』『モブキャラに』『絡まれているのかな？』」

彼は転生者に『敵意』や『嫌悪』の入り混じった言葉を投げつけられるがそれでもヘラヘラ笑って逆に転生者を煽る。

「モブ…キャラだとオ？」

転生者の額に青筋が立つ。

「許さんぞ…」

そして、転生者の言葉使いが変わり、転生者の後ろに無数の『金色の波紋』が生み出され、そこから無数の武器が現れる。

「まずい…逃げて!!」

「雑種ウウウ!!!」

一夏から逃げる様に言われた瞬間、現れた無数の武器が彼を貫く。そして、武器が何本か地面に逸れたのか土煙が上がる。

その土煙が晴れた時、そこにはあらゆる武器に貫かれて、死亡している彼の姿があった。

「あ…ああ…そ…んな」

「フン…所詮はこの程度か…」

死亡している彼を見て一夏達は絶望し、転生者は脅威が去ったと安堵する。

が、しかし

ここからが『過負荷の真骨頂』である。

『おいおい』『ダメだぜ?』

『!?』

『ちゃんと』『急所に』『刺さない』

彼はまるで貫かれているのが『嘘』の様に起き上がる。

その気持ち悪さに転生者の後ろの女子生徒たちが吐き気を催す。

そして、トドメとばかりに自身の頭部に自身を貫いている剣を刺す。

その行動で女子生徒たちの心が完全に折れてしまった。

もちろん、その気持ち悪さは転生者も感じており、心は折れずとも

彼への圧倒的な『嫌悪』が心を支配する。

「なんで…生きてやがるんだテメエはア!?!」

『なんでって』『僕が生きてちゃいけないのかな?』

「亜球磨川…そう言う事じゃないと思うぞ?」

『…ああ!!』『なんで僕が生き返ったって?』

『簡単なことさ』『否実在生』リアリティフィクション『僕が死んだ事を嘘にした』

『!?』

「なッ!?!」

嘘にした。

スキルで『死んだ事をただのもしもの話に螺子換えた』のである。
『気持ち悪さ』『嫌悪』『意味不明さ』が転生者の心を完全に支配し、早急にこの気持ち悪さを取り除きたいと体が動く。
「一度で死なねえなら…何度でも殺すだけの事オ!!」
そして、またもや『金色の波紋』が現れる。
「一斉しや」「殺す?」「生憎だけどその蔵はもう」
『空っぽだ』

だが、そこから武器が現れる事は無く、転生者は亜球磨川の投げた『プラス螺子』によって肩を貫かれる。
「!?なんで出てこねえ!?!」

『君のISの武装も』『見てご覧』
転生者は亜球磨川の言われるがまま自身の『専用機』の中の『武装』のコンソールを開く。

そこには驚愕の文字が書かれていた。

『武装なし』

「なッ!?どういう事だ!?!なんで『武装』がねえ!?!」

「まさか…あつくくん」

「そう」リアリティフィクション
『否 実在生』

『世界に武器がある』『と言う現実を』『嘘にした』

『もう誰も』『戦争で傷つかなくてもいい』

『まさに』『平和だ』

そう、彼は世界から武器を消した。

剣も槍も銃も…あらゆる武器を世界から消したのだ。

「テメエは自分の身を守る為だけに世界から武器を消したのか!?!それがどれだけの悪事か分かってんのか!?!」

『『悪事?』』

『僕は悪くない』

『じゃあさ』その蔵ってもういらないよね」

すると、転生者の肩を貫いていた『プラス螺子』が逆回転を始める。そして逆回転をしている螺子がだんだん金色に染まっていき…完全に金色になった。

その金色の螺子は亜球磨川の手に戻って行く。

「まさか…」

『自書創り』その能力を螺子に移した」

「この能力は僕が頂いた。」

「テメエ!!返しやがれ!!」

転生者は亜球磨川に能力を返す様言うが亜球磨川はその螺子を自分に刺す。

『自書創り』僕にその能力を移し替えた。」

「よし…この能力は今日から『王の螺子』だ!!」
ゲート・オブ・ネジロン

「「ダサイ!!」」

一夏達三人からツツコミが入るが亜球磨川はヘラヘラ笑う。

そして転生者は怒りに震えていた。

「返せ!!俺様の『王の財宝』!!」

『…』

転生者は亜球磨川に掴み掛かり返す様に命令する。

が亜球磨川は『マイナス螺子』を螺子込む。

「グガア!?!」

最初は腹に。

『命令すれば』『なんでもしてくれろ』『思った?』

次は足に。

『怖い顔で睨めば』『勝手に平伏すと』『思った？』

次は肩に。

『甘えよ』』

そして最後はハイキックで顔面に。

『僕は』『その甘さ』『大っ嫌いだぜ』』

全身螺子だらけにされた転生者に刺さっている螺子を『嘘』にする。だが転生者の気絶までは『嘘』にはせず、その場に適当に投げつけて置く。

『よしっと』』

『ええーと、あつくんでいいのかな？』

『正解でえーす！』『まあ積もる話もありますし』『ここを移動しますか』』

『そうだね』

四人はここを移動しようとするが最後に亜球磨川が思い出したかのように螺子で串刺しにされている女子生徒たちに振り向き『否実在生』を使う。

『君達が』『螺子伏せられた事を』『嘘にした』』

『じゃ』『また今度』『とか』』